

The power of an integrated university connected
by special needs education

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡本, 康哉 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00028725

教育実践報告

特別支援教育で繋がる総合大学の力

岡本康哉

(静岡大学教育学部附属教育実践総合センター)

The power of an integrated university connected by special needs education

Kosai OKAMOTO

要旨

「特別の支援を必要とする子どもの理解」が教職必修科目として開講され、筆者は2年間に渡り教育学部以外を担当することとなった。以前より、特別支援教育は「学際的な力」を必要とすると感じていたが、多くの異なった学部生に接する機会は、この思いを確かめる好機ともなった。学部を大きく越えて、同一テーマでの考察をまとめ比較して、さらにその結果を学生に返還することで、新たな学びの変化を期待したものである。そして、発展型としてラウンドテーブルを実施した。なお、この取組は、「複数の視点で問題解決」をしようとする試みでもあり、総合大学としての静岡大学という組織をフル活用しようとする試みでもある。

キーワード：特別支援教育 学際的 多様性 ラウンドテーブル 総合大学

はじめに

筆者は教育学部で特別支援教育を担当している。教育という領域からの関わりを中心として取り組んでいるが、その課題の解決には、領域を超えた他分野との協働なくしては遂行できないことがあると感じていた。例えば、医療での取組、福祉制度や行政での取組、ICTの活用、等との関連を捉える必要性である。幸いに勤務する大学は総合大学として多くの学部を擁している。この有利な環境を活用すれば、この課題への足がかりとなると考えての実践である。

先行研究では、「日本の国立の研究大学においては、教育研究活動を推進していく上での「学際性」の重要性は認識されているものの、その目標を実現するための資金やポストを大学本部が十分に有しておらず」(2021: 福井・新見・林)との記述もあり、地道な実践研究として試行する価値はあると考えた。

1. コメントペーパーの収集と分類

(1) 方法

①対象

「特別の支援を必要とする子どもの理解」は1単位で2年生向けの授業である。筆者は、令和2年度から担当して、本年度はその2年目になる。担当学部は、人文社会科学部、地域創造学環、理学部、農学部、工学部、情報学部であり、静岡大学の教育学部以外の全てとなる。

令和2年度の受講生数は人文社会科学部：17人、地域創造学環：5人、理学部：57人、農学部：13人、工学部：8人、情報学部：17人<合計：117人>

令和3年度の受講生数は人文社会科学部：33人、地

域創造学環：13人、理学部：78人、農学部：17人、工学部：7人、情報学部：15人<合計：163人>であった。

②内容

この授業において、毎時間コメントペーパーで提出を求めた内容のうち、第1回の「あなたの学部等の専攻からこの分野(障害・特別支援教育)に貢献できると思われることを述べてください」というコメントをとりまとめることとした。

このことで、顕著に各学部や専攻の特色が表れ、多様(ダイバシティ)な考察が期待できた。

③倫理的配慮

毎時間の授業のコメントペーパーには但し書きとして「お書き頂いた内容を授業で活用して双方向性のある授業を進めたいと思います。活用しても良いですか?(氏名は伏せます)不可の場合のみ括弧内に×を付けてください。⇒()」として公表を望まない学生のコメントは掲載していない。

(2) 結果

以下に、その主なものを記述する(表1)。主たる対象障害を「肢体不自由」「視覚障害」「聴覚障害」「言語障害」「知的障害」「発達障害」「精神障害」「病弱・身体虚弱」「脳神経・染色体/内分泌系/遺伝子」「障害一般」とした。これは、障害者基本法による「身体障害者」「知的障害者」「精神障害者」を基本とし、さらに身体障害者福祉法により細かくは「視覚障害」「聴覚障害」「肢体不自由」、発達障害者支援法からは「発達障害」とした。なお、これには分類されないが、学校教育法施行規則により学校現

場で対応する障害として、「言語障害」「病弱・身体虚弱」系／遺伝子」とし、さらに全ての障害へ波及するものは「障害一般」とした。
 がある。また、様々な障害に関連してその原因ともなり得る脳や遺伝に関することは、「脳神経・染色体／内分泌

表1. 具体例とその分類

障害	手段	学生から提示された具体例	学部
肢体不自由	シミュレーション／画像解析・処理	・障害者の行動パターンをシミュレーションし、街中や学校で生活する上で障害となるものや場所を探しバリアフリーなものへと改善・補助するための電子機器のシステム異常が起こらないようにプログラムを組む・画像は行列の応用として表すことができるため、光学分野のため数理システム工学の分野だけではできないが画像解析、処理を行うことで弱視の人の助けとなるような映像、画像を作る	工学部
	データ解析	・データの解析により、この分野に貢献。具体的には、義手の指を自由に動かす。まず、その人が指を動かすときの脳の働きは、義足に関しても活用できると考える。義足では体重移動がうまくいかないと倒れてしまい、うまく歩くことができなくなるので、重心のずれを計測し、倒れないように関節を自動調節したり、脳の信号から足の動作を再現するなど、このような動きの計算に役立てられる。	工学部
	物質科学（材料）	・義足のばね部分の材質改善。 ・レーザーも研究もされていて、レーザーの反射からどの方向にどんな障害物があるのか 2-3メートルくらい前から察知することができるので歩行中に近くの人にぶつかることや、段差などにつまずくことを防ぐことが可能。	工学部
	機械開発	・重さを軽減するためのパワーアシストが開発され、それを足の不自由な方が使用できるように転用すること	農学部
	新しい電池の素材研究	・まず現在ある充電電池よりも充電量よりも増やすことができ、その上軽量化も見込まれる。特に肢体不自由の人たちの補助具等、電気を必要とする上に移動も伴う場合、すごく貢献になると考える。	理学部
	筋電	・人間は身体、つまりは筋肉を動かすときに、脳は微弱な電流を介して指示を出している。この電流を読み取ることができれば義手や義足を使用者の思い通りに動かすことが可能になる。実際、もうすでに研究は進んでおり、筋電義手という名前でも世に出ている。	理学部

視覚障害	応用生命科学	・画面上に表示されている文字やエラーを音声で伝える機能があるが、その改良を行いたい。	農学部
	ICT（スマホ）	・スマホやタブレット端末による筆談や音声案内などによる補助や、音の出ない信号で、赤の時はスマホなどから音が出るようにするなどで貢献できる。 ・画像認識やAR、VRの技術が発展すれば、コースパケットにも出ていたが、脳に直接信号を送ることや網膜投影などにより障害のない人と変わらない生活ができるようになると思う。	情報学部

視覚 障害	音声情報処理	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の学科は教育理念として「人と環境にやさしいシステム」作りに貢献する人材を育成することである。 ・音声情報処理などの技術が発展すれば、視覚に障害を持っている人が日常生活で他人に聞かなければわからないことが、助けを求めなくとも自分で解決することができる。 	情報学部
	光学	<ul style="list-style-type: none"> ・視覚障害の中の色覚障害や光覚障害の症状を緩和するようなレンズ（眼鏡やコンタクト） ・今車で使われているような車間距離が近いと音が鳴って教えてくれる技術を活用して、目が見えない人が歩く時に前方 3,4m に人がいたら音が鳴るイヤホンのような製品。 	理学部
	センサー	<ul style="list-style-type: none"> ・身近でできることを実施していくことが大事。例えば、視覚に障害を持った人用にスーパーの商品棚に買い物かごに反応して商品カテゴリや商品名を読み上げるセンサーを設置する。 	理学部
	脳科学	<ul style="list-style-type: none"> ・2017年には補聴器の視覚障害者バージョンになる Oxsight のスマートグラスが開発されました。これは脳への接続や眼球との情報のやり取りはせず、主に弱視者向けのもので、もの同士の境界線がはっきりとし、奥行きがわかりやすくなる。 	理学部
	ロボット工学	<ul style="list-style-type: none"> ・脳波をキャッチして自分の動きたいように動いてくれる素晴らしいロボット。このように脳波を読み取ってロボットを動かすことができるのであれば、逆にロボットの見た世界を目が見えない人たちの脳に送ることができるのではないかと考える。 	理学部
	医療器具	<ul style="list-style-type: none"> ・色覚の認識を助けるコンタクトレンズや網膜移植などの新規開発も考えられる。 	理学部
	授業支援	<ul style="list-style-type: none"> ・硫黄や塩素の発生など臭いで分かる実験などで化学に親しんで欲しいと考える。 	理学部
	生物学	<ul style="list-style-type: none"> ・他の生物の視覚を研究しその特性を科学技術に応用することで貢献していけるのではないかと考える。 	理学部
聴覚 障害	CG	<ul style="list-style-type: none"> ・CGの技術の中には顔認識を用いたものがある。聴覚障害の方は、読唇術で相手の言葉を読み取り、手話などで意思疎通をはかるが、なかなか両者にとって自然な会話は成り立たない。そこで、相手の話していることを読み取り、画面に文字として表示するソフトがあると、今以上に聴覚障害を持っている方の意思疎通が自然とできると考えられる。 ・聴覚障害の方と話している相手の表情を認識するためのカメラを眼鏡に搭載することによって、より目と目を合わせて話すと言った、表情を見て感情が詳細にわかる話し方ができると思う。 	工学部
	電磁波	<ul style="list-style-type: none"> ・特に電気電子工学科なので聴覚障害がある方の脳に直接電磁波で音声を認識させる技術などは脳科学的なことは一切わかりませんが実現可能なものではないかと感じた。 	工学部
	ICT（データ）	<ul style="list-style-type: none"> ・音声、言語のデータを高速にかつ正確に変換する技術を発展させることができれば、今後の障害者の方々の日常生活に大きく貢献できると考える。 	情報学部

聴覚障害	ICT（ボディランゲージ）	・コミュニケーションの分析では、ボディランゲージやテーマの展開から話し手の感情や話の区切りを見つけていく。そういったことから、聴覚障害の方がコミュニケーションをする為に、マイクを装着してもらいそこから收音した情報のみでコミュニケーションを取るだけではなく、カメラを装着してもらいその映像から相手のボディランゲージなどを読み取り脳に刺激を与えること話し手の感情をより豊かに感じ取れるのではないかと考えた。	情報学部
	音声情報処理	・情報学部の一部の授業では先生がマイクで話したことなどを即座に音に変換して教室の前にある大きなスクリーンに文字化して投影しているものもある。もし耳の不自由な人であれば授業の内容を聞き取れなかった際や授業の進行状況の把握などができると考える。	情報学部
	医療機器	・補聴器だったらハウリングが起きる可能性を減少させ、成長によって生じる耳の大きさの変化にも対応できると考えられる。	理学部
	ノイズキャンセリング	・ノイズキャンセリングイヤホンは聴覚過敏症の人にとって良いのではないかと考える。某大手の企業から出ているノイズキャンセリングイヤホンは作業や音楽に集中にしたいために周りの音をほとんどカットしてくれる。このような技術を利用して、生活する上で必要な音だけを拾い、他の音はカットしてくれるノイズキャンセリングイヤホンを作成すれば、聴覚過敏症の人はとても楽になるのではないのか。	理学部

言語障害	言語聴覚	・言語聴覚士として、改善へのサポートをすること	人文社会科学部
	発音支援	・正確な舌の位置を教えることで正しい発音を導くことができるのではないかと 思う。	人文社会科学部
	医療機器	・口内に舌を通常的位置より高くおける機械などを入れて置き、口の上に舌が付きやすくなるなどの効果をうむことにより、舌を回りをやすくなったり、特定の行の発音がなめらかになるなどの効果を期待することができるだろう。	理学部
知的障害	プログラミング	・障害者で勉強が苦手な人がプログラミングという普段とは違うものに触れるのはいい刺激になったりもするのかなと考えられる。プログラミングはできたとう達成感が感じやすいと思うので、達成感を感じてもらえると思う。	情報学部
	教材開発	・理科の新たな教材の開発は理学専攻から貢献できることの一つだと思います。	理学部
発達障害	ICT（電子黒板）	・例えばタブレット、電子黒板を用いることで、自らの口で発言することが苦手である生徒には、タブレットで入力してもらい、それを電子黒板などの端末に送信してもらうことでクラス全体への共有が可能になると思う。 ・発音や言語の組立そのものを苦手とする生徒には、動作や感情などに関するイラストのようなものを表示することで、自らの意思を表現してもらえるようなアプリケーションソフトなどを開発、活用することができるのではないだろうか と考える。	情報学部
	数学	・数学は学問的な側面を持つ一方、言語としての側面を持つため、言葉ではない新たなコミュニケーションツールとしても使うことができる。	理学部

発達障害	遺伝子研究	・発達障害の原因究明や、それらの障害を治療する薬の開発などで貢献できると考えられる。	農学部
	ICT（深層学習）	・知的障害者の考えていることをアウトプットするために深層学習を用いることなどがあげられる。後は統計学を用いた「一人一人が落ち着ける環境の考察」や視覚障害者の方でも見やすいようなアプリケーション開発などでも貢献できるだろう。	情報学部
	数学(数式)	・視覚的なものを数式、つまり文にすることで聴覚的に表すことができる。このことは、視覚障害を持つ人にとって大きな助けとなるだろう。	理学部
	教育方法	・算数障害の症状の可能性がある。この障害は一般的には治らないため、私たちが出来ることは問題を解決する方法を探すことである。	理学部
精神障害	AI / ディープラーニング	・AI やディープラーニングを使って患者の情報からどの精神病や障害に当てはまるかを素早く判断することができる。精神病には数多くの種類があり明確な定義づけもきちんとされているとは言い難いため、AI の導入によって誤診断が減らせるのであれば貢献できていると言えるだろう。	情報学部
病弱 / 身体虚弱	応用生命科学	・病弱であったり身体虚弱であったりする児童の副作用を減らして日常生活を送りやすくしたり、幼い子どもにとって恐怖を伴う外科的手段ではなく内服によって病気の治療を行うことで心理的な負担を小さくするなどのサポートを可能にする。	農学部
	栄養学	・栄養豊富な機能性食品を開発することで、病弱・虚弱体質のこども達の健康増進などに貢献できる	農学部
脳神経 / 染色体 / 内分泌系 / 遺伝子	製薬	・脳神経やシグナル伝達に関する治療薬開発を行いたい	理学部
	製薬	・21 番染色体上のどの遺伝子が神経系の発達や早期老化に関わっているのかが解明され、そのたんぱく質を阻害する薬剤を作ることができる。	理学部
	生物学	・神経伝達や内分泌系に異常を抱えている障害などに関しては治療や対処方法を見つけることができる可能性があると考えられる。 ・障害について生物科学科はより詳しく学び理解するチャンスがあると思う。そのため障害についてあまり知らず、身近ではないと感じている人達にわかりやすく説明することができると考えられる。	理学部
	医療開発	・プロテアーゼの研究が進み、特異的にプロテアーゼを働かせられるようになれば、障害を原因から治療することができるのではないかと考察する。	理学部
	遺伝子研究	・その遺伝子変異のデメリットばかりではなく、メリットについて調べ、障害があるからこそできる社会貢献の方法を追求する。	理学部

障害一般	教育プログラム	・経済産業省が推進する「未来の教室」では、GIGA スクール構想（1人1台ずつパソコンの所持と通信環境の整備により、画一的な学習を推進すること）も踏まえ、令和の教育改革に向け3つのビジョンが掲げられ、「学びの自立化・個別最適化」について述べられている。一人ひとりの発達・認知特性に応じて、幼保・小・中・高・大とオーダーメイドの教育プログラム構築が出来れば良いと考える。また、個々のデータを集約し、データ分析を行うことが出来れば、全国の教職員へ蓄積された知識がさらに展開できればよりよい社会が構築できるのではと考える。	工学部
------	---------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----

障害 一般	教材づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・効率の良い特別支援教育向けの教材の作成や、ICT教材の利用などで貢献できると考える。これらは特に、視覚障害や聴覚障害の生徒への教育の手助けになると思います。 ・様々なシミュレーションなどを製作し、支援が必要な生徒の周りの生徒への理解へつながる働きかけができると思う。 ・板書など筆圧などの問題で描くことが難しい生徒には ICT の利用によって学習の効率化がすすめられると思う。 ・支援が必要な生徒にピンポイントで合ったソフトなどを製作・カスタマイズすることができる可能性がある。 	工学部
	脳波	<ul style="list-style-type: none"> ・最近ではメンタルヘルスに関しても脳波検査を行い、受診者がどのような精神状態か診断することができるようになった。しかし、それはあくまで検査をするのみで、その脳波パターンから治療を試みることはありません。このことから、特定の波長を対象者に当てることで安定を促すことができれば良いと考える。脳波を当てるだけでなく、音や共感性を利用して安定を促すことなどば可能だと考える。 	工学部
	論理回路	<ul style="list-style-type: none"> ・論理回路などの授業を通して、ハードウェアの成り立ちについて詳しく学んだ。こういった内容を生かして、それぞれの障害を持った方がより過ごしやすくなるような機械を作り、また軽量化や高機能化をすることで、日常生活がより安全なものになるように貢献することができると思う。 	工学部
	ICT (デバイス)	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な障害を持つ人々にも平等に情報が行きわたるような、障害者用に工夫されたデバイスやプログラムなどの情報が詰まった端末を開発したり、障害者についての理解が国民全体に広がるような情報発信源となるなど、どの学部でも障害・特別支援教育に貢献する方法は考えればいくらでも出てくると思う。 	情報学部
	ICT・VR	<ul style="list-style-type: none"> ・視覚障害を抱えた生徒が、教科書やノートに対して直感的な操作で文字の拡大や、明るさの調整を行うことで、周囲の視線を意識せずに授業を受けることができると考えた。 ・SNSのようなチャット機能も加えることにより、聴覚障害の生徒が他の生徒とのコミュニケーションを円滑に進めることができると考える。 ・VR 技術の活用により、肢体不自由の生徒も、実験などに主体的に参加できるのではないかと推測する。 	情報学部
	AI/VR	<ul style="list-style-type: none"> ・例えば目が見えない、耳が聞こえないなどの行動情報を AI に学習、蓄積させ実際に障害を持つ子どもを相手にする前に AI を利用して練習をすることで備えることができるし障害を持った状態を感覚器官も接続した VR で体験することができれば主観、客観の両方で障害を学ぶことができる。そうなれば客観のみで学んでいる現在と比べれば大いに進歩した指導ができるだろう。このように情報学の分野は障害を情報化して扱うことを通してこの分野に大きく貢献できると考える。 	情報学部
	ICT	<ul style="list-style-type: none"> ・情・現代ではインターネットの技術が大幅に進歩したことにより、オンライン授業やタブレット端末・PC を活用した授業を行うこともできる。これらを利用して、障害や持病を抱えている児童・生徒でも、家から授業を受けることができ、自分の体調に合わせた勉強をすることができます。病気のために学習についていけない子どもたちにとって、自分の好きな時間に受けることのできる授業は大いに役立つと考えられる。 ・視覚・聴覚に障害を抱えている子どもたちには、音声や図表を活用し、より分かりやすい授業ができるのではないかと考えられる。障害・特別支援教育に貢献できる学問は数多くあり、それらが組み合わせればより良い教育ができるようになると思います。 	情報学部

障害 一般	Webページ	・障害や特別支援教育に対する世間の認知を「情報」を通じて上げていくこと。私の専攻では、Web ページを作成したり見やすいフォントを研究したり、インタビュー技術を習得している。障害をもつ方々に対する支援を呼びかけたり、障害をもつ人やその家族をインタビュー対象者としてインタビューすることで世間の人々に知識を広めたりすることができると思う。	情報学部
	映像	・障害を持っている人たちが頑張って夢をかなえようとする姿を映す番組は多くありますが、障害を持った子供たちの日常生活を映す番組はあまりありません。「聲のかたち」のように主人公を別の普通の人に移すことでまた新しい感情移入が生まれ、障害を持った人たちに対しての考え方に変化が生まれるといった手助けに貢献できるのではないかと考える。	情報学部
	環境デザイン	・視覚障害者や聴覚障害者、肢体不自由者など、身体のどこかが不自由な人も不自由な人と同じように生活できる環境のデザインのデザインを考えることに貢献できると思う。ここで言う環境とは、学校や街、さらには家庭を指す。例えば、街のデザインで言えば車いすの人が移動しやすいような道の整備、視覚や聴覚が不自由な人も不自由なく使うことのできる公共設備の設置を考えることである。他にも、市や都道府県、さらには国単位で、視覚障害者や聴覚障害者に対する一般市民の認識を深める取り組みを考えることによっても貢献できるのではないだろうか。例えば、セミナーを開くだけではなく、YouTube に動画を上げたり、Twitter で拡散したりなど、情報社会ならではの方法で市民・国民の認知を深めていきたい。	情報学部
	情報機器	・現在の情報機器が必ずしもすべての人々に使いやすい仕様になっているわけではないため、今後はこの身体機能や理解度などに応じてより細かい技術的な支援について研究し、少しずつ実装されていくことが望ましいと思う。	情報学部
	情報技術	・遠く離れた人とのコミュニケーション。好きなことをする、というのはどんな人間にとっても大切なことであって、情報技術の利用は比較的それを自分一人でやることのできる可能性が高いと思う。言いたくないことは言わなくていいし、会いたくない人には会わなくていい。良くも悪くも一人の世界を堪能できる。発想力や感性の高い障害を持つ人たちが、この情報技術に触れて発展させていくことはとても興味深いことに感じる。	情報学部
	ビッグデータ	・私の学科は行動情報学科でビッグデータ解析を行って、そこから新しい知見を獲得することができるため、同じ障害を持つ人たちの膨大なデータを集め分析することで障害が生じてしまう原因を突き止めたり、障害の症状を和らげるために必要な行動が少しでもわかったりするのではないかと考えられる。	情報学部
	スポーツ	・サイバスロンという障害者が様々な装置を用いて臨む競技	地域創造学環
	地域創造	・障害を持っている人たちに優しいまちづくりをする。	地域創造学環
	コミュニティデザイン	・「コミュニティ」の形成を考える。理系専攻の人たちとは異なり、技術によって障害のある人々への直接的な支援をすることは正直難しい。しかし、障害を持つ人々が少しでも過ごしやすくなるようなコミュニティをデザインすることによる貢献はできるのではないかと考える。具体的な方法がすぐに思いつくわけではないが、例えば障害を持つ人同士やその教育に関わる教員同士で上手く情報を共有できるネットワークを整えたり、そのネットワークを参考にした過ごしやすいく集団やイベント・施設などを作ったりという、環境を整えるといった方向性の貢献である。	情報学部

障害 一般	交流	・地域住民が障害の有無にかかわらず交流できるイベントを開催したり、学校の授業の一環で特別支援学校に通う生徒と交流できる機会を設けたりするなど積極的に関わっていける仕組みづくりが求められている。科学技術のように直接機能を補完するものを作れるわけではないが、障害があっても生きやすい社会の仕組みをつくるという点で貢献できると思われる。	人文社会科学部
	文学	・現代と昔の文学作品における「障害」を持つ方への認識の変化、呼称の変化を比較することで、日本で「障害」を持つ方への意識がどう変わり、またどこが変わっていないのか、これから課題にすべきことは何かを知ることができる。	人文社会科学部
	精神安定	・動植物との触れ合いによって日常生活に安心を届けること	農学部
	数学	・数学が他の学科と違う点はペンと紙があればいつでもどこでも学ぶことができます。良くも悪くも目で見えて感じる、手で触って、音で体験するということがないその中で数学を学ぶこと、数学の楽しさを少しでも広げてゆきたい。また障害を持つ方の中に数字が風景や色がついて見えているという方もいます。いわゆる共感覚。共感覚を共有することなど数学の発展に役立つのでは無いかと考えます。障害を持つ方への数学教育が数学発展への貢献となるかもしれない。	理学部
	スポーツ	・障害者にとってスポーツを積極的な自立と社会参加を促進できるような場にする。そのためには、一般的なスポーツ指導に優れることの他に、より障害についての理解を深めなければならない。障害者が親しんでいるスポーツは、障害のために出来ないことがあったり、安全に行うためにルールを少し変えているだけで、年少者や高齢者のスポーツ振興にも通じるものである。	地域創造学環
	食品	・一般に専門機関の処方する医薬品や専門医師による施術等の治療が行われるわけだが、医薬部外品として様々な商品が販売されているのもまた事実である。「機能性表示食品」はその代表例ではなかろうか。たとえば、関節の動きをサポートする機能をもつ食品がある。現在のところ、これらの商品は障害に対して開発された商品ではないが、食品を通して特定の栄養分を摂取することは、障害の改善に有効な手立てだといえるかもしれない。また、不自由な部分に対する薬として服用するのではなく、美味しく楽しく食べるという食事の良さを生かすことで、ストレスを感じさせない改善方法としての貢献が期待できるのではないだろうか。	農学部
	リハビリテーション	・リハビリテーションの分野で科学技術は活躍することができると思います。	理学部
	法学	・障害者が暮らしやすいような法律を考え、施行することだと考える。	人文社会科学部
	経済学	・障害者の子どもが無理なく学習をできる教育サービスを考える	人文社会科学部
	文学	・文学を通して障害についての理解を人々に促すようにすることができる。	人文社会科学部
	経営学	・共に働く社員に対して障害に関しての知識を得る機会を与える同じ労働力を提供して、障害を持った人が働きやすい社内環境ができる。	人文社会科学部
	地域創造	・子どもたちものびのびと活動に打ち込んでいけることのサポートで、個性を活かしてできる取り組みがあると考えます。	地域創造学環
	農食コミュニティデザイン	・特別支援教育において農作業を通じて命の大切さ、命の教育ができると思う。	農学部

(3) 考察

「表1. 具体例とその分類」での具体例を「障害一般」から抜粋してまとめてみると（図1）のようなイメージができる。

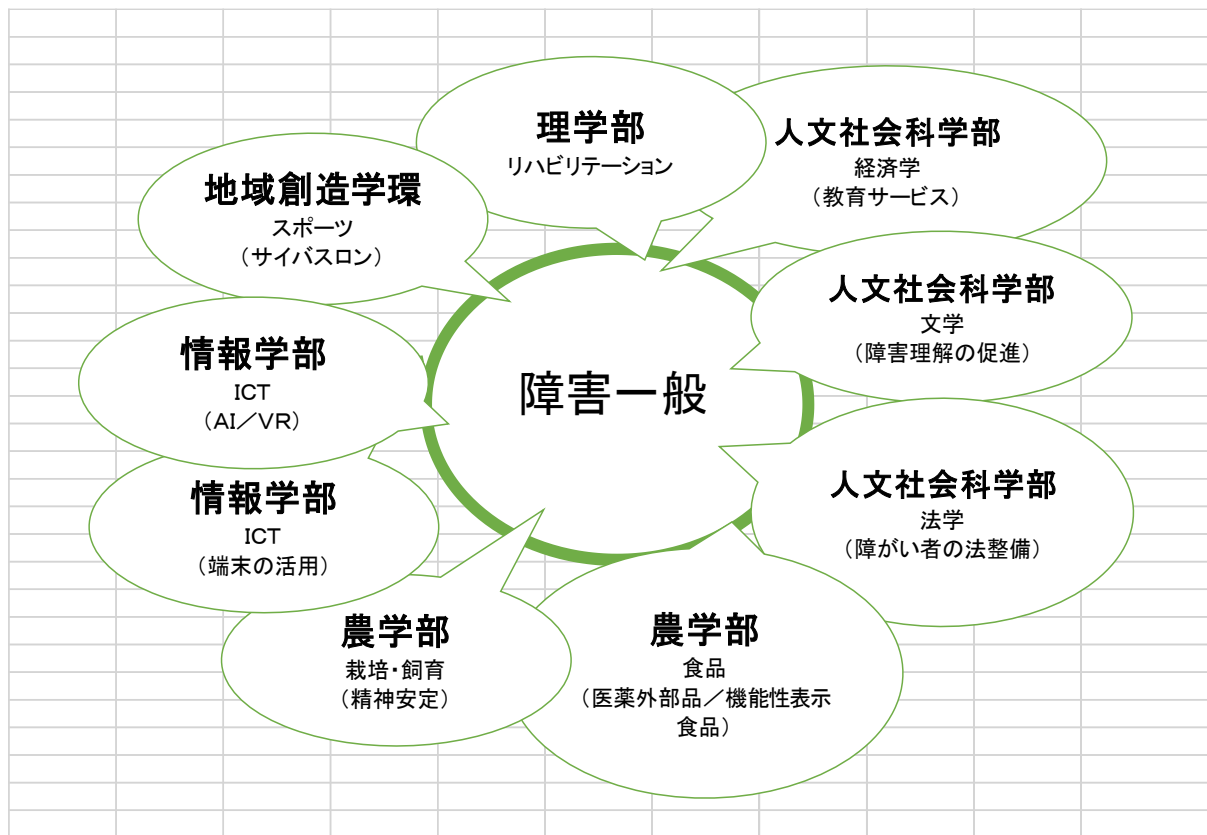


図1. イメージ図

理学部から「センサー」、人文社会科学部からは、「文学での障害の扱い」という観点、農学部からは「栽培や飼育のセラピー効果」を狙ったもの、工学部からは「シミュレーション」、情報学部からは「ICT、VR」等の技術を使っているもの、地域創造学環からは「新たな障害者スポーツ」の開発という観点から、理学部からは「効率的なリハビリテーション」の開発等といった具合であった。

このように、同じ学部内でも、ましてや他学部からの提言は様々であり、相互に参考になることが考えられ、刺激し合うことも予想された。さらに、この有用性が確認出来れば、これらの思いを交換してさらに深めたり、協働したりできる機会として、いわゆるラウンドテーブルが想定できた。

2. ラウンドテーブルの実施

(1) 方法

各学部が繋がれば面白そうと感じつつも、授業では主に学部ごとになり、学部を越えての交流的な学びは難しかった。また、静岡キャンパスと浜松キャンパスという隔たりもあった。

従って、既に「特別の支援を必要とする子どもの理解」の授業は終了しているが、ここに全く強制しない自由参加のプラスαの学びの機会として、Zoom参加による「ラウンドテーブル」を開催することを企画した。

ラウンドテーブルへの学生の関心の程度を調べたが、以下のようであった。

アンケートは工学部・情報学部の当授業を履修している学生20名からのものである。最終の授業にて実施し紙面にて回収した。質問内容及び結果は以下のようである。

- 1, 興味の程度は⇒かなりある (1名) ある程度ある (17名) あまりない (2名)
- 2, Zoom参加でのやり方は⇒賛成 (18名) その他の方法 (2名) (・可能なら対面)
- 3, 時期⇒ 授業期間中 (13名) 休日 (0名) 休み期間中 (7名)
- 4, もし、ラウンドテーブルが実現したら、あなたに「ファシリテーター」をしてもらうことは可能ですか？
⇒ 可能 (3名) 難しい (17名)

5, このような企画についてお気づきのことをお書きください。⇒

- ・休みの期間中でないと、実験レポートやテストが多く、参加が難しいです。
- ・具体的にいつ行われるかによって、参加者が大きく変わる気がします。
- ・とても良いと思います。
- ・学生だけでなく先生を交えることでより高度な話し合いができると思います。
- ・Zoomでの話し合いはなかなか盛り上がらないので、対面がいいと思いました。
- ・参加できるのであれば積極的に参加したいと思う。
- ・学部を超えての意見交換はなかなかないものなので、新鮮で良いアイデアだと思った。
- ・特にはないが抽象的な議案より具体的な議案が1つは準備されている方が、議論は進みやすいのではないかと感じる。
- ・話し合う機会を設けることで、他者の意見を聞くことができ、また自分の意見も整理することができ、新たな視点に気づくことができるため、重要であると思いました。
- ・各学部については全く未知であるため、私たち自身も刺激になると思った。

このように、ラウンドテーブルを開催する意義を感じたので、今年度中の開催を目指すこととした。

<質問内容>

<p>※以下はアンケートです。成績には影響しませんので、お答えをお願いします。</p> <p>「各学部からの障害・特別支援教育への貢献」について、全学部参加で1時間程度の話し合う機会(ラウンドテーブル)を設けるとするならば如何でしょうか?</p>
<p>1, 興味の程度は (○) ⇒ <input type="checkbox"/> かなりある <input type="checkbox"/> ある程度ある <input type="checkbox"/> あまりない</p>
<p>2, Zoom参加でのやり方は (○) ⇒ <input type="checkbox"/> 賛成 <input type="checkbox"/> その他の方法 ()</p>
<p>3, 時期 (○) ⇒ <input type="checkbox"/> 授業期間中 <input type="checkbox"/> 休日 <input type="checkbox"/> 休み期間中</p>
<p>4, もし、ラウンドテーブルが実現したら、あなたに「ファシリテーター」をしてもらうことは可能ですか? (○) ⇒ <input type="checkbox"/> 可能 <input type="checkbox"/> 難しい</p>
<p>5, このような企画についてお気づきのことをお書きください。⇒</p>

(2) 結果

「特別の支援を必要とする子どもの理解」受講者を対象として募集した結果、2名の参加者を得て実施した。

また、情報基盤センターの永田正樹先生の参加も得られた。

実施は2022年1月13日4コマであった。時間は約一時間で、たつぷりと意見交換できた。

参加者のアンケートは以下のものである。

①今回のラウンドテーブルの目的である「複数の視点からの課題解決」の有用性は感じましたか。

・十分に感じた(2名) ・概ね感じた(0名) ・やや感じた(0名) ・ほとんど感じなかった(0名)

②このラウンドテーブルの前と後では、御自分の意見についての変化がありましたか。

・あった(2名) ・特に無かった(0名)

<その理由>

・理学部数学科の方から数学が貢献できることについて教えていただいて、共感覚のように数字に色がついて見えることや紙とペンで簡単にできる手軽さが応用できると学んだ。

・変化では無いのですが、他の学部、分野と協力することで問題解決や新たなアイデアが生まれることが確信に変わったような気がします。

③今後もこのラウンドテーブルの開催を目指していますが、そのための配慮等についての御意見をください

・より様々な学部の生徒や先生、他の大学の方なども参加したら面白いなと思いました。

・対面でやってみたいです。

④どのようなことでも良いので感想などがありましたらご記入ください。

・貴重な機会をありがとうございました。もしまた機会があれば是非参加させていただければ幸いです。

・今回は人数が少ないことで話しやすかった、(緊張が緩和された)という良い点もありましたが、やはり色々な学部学科の人と意見交換をしてみたかったです!今回は貴重な機会を頂きありがとうございました!障がいを取り巻く様々なことについてもっと勉強したいと思います。

(3) 考察

僅か2名の参加ではあったが、十分に参加への意欲が高い学生であり、活発な意見交換が出来た。同じ学部内だけでは気付かないことがあり、他学部の意見は新鮮に感じられたようであった。また、理系からの話の中からも障害者の心を支える視点での話題があり、人文社会学部からのコメントがあればさらに良かったと思われる。

また、教育での課題も共有したいとの思いも語られ、教育学部からの参加も今後促していきたく考えた。なお、情報基盤センターの永田正樹先生からも、「有益な企画」とのコメントを頂いた。

3. 総合考察

物事の解決方法を様々な側面から考察することで、多様な考え方を知り、それらを組み合わせていくことで何が見えてくるのかを発見すること。これは「学際的」と呼ばれる手法でもあるし、「多様性」(ダイバシティ)の強みを感じることもある。さらに欲張れば、『多様性の科学：画一的で凋落する組織、複数の視点で問題を解決する組織』(マシュー・サイド 著)が言うところの「認知的多様性」で「複数の視点で問題解決」をしようとする試みでもある。

そして、総合大学としての静岡大学という組織をフル活用しようとする試みにも繋がる。

このように、大きく学部の枠を越えた取組は、これからの総合大学の新しい力の示し方として重要になると考える。

なお、ラウンドテーブルでは、今回はわずか2名の参加学生であったが、その有用性は確認できたため、次回のラウンドテーブルも企画してさらに展開していきたく考える。

【参考文献】

- ・『学際的な教育研究に対する大学の戦略』大学経営政策研究 第11号(2021年3月発行) 福井・新見・林
- ・『障害児教育研究』教育学研究(1992年59巻3号) 茂木敏彦
- ・『多様性の科学』(マシュー・サイド 著)「出版:ディスカバー21」